

海軍航空部隊（予科練）の思い出

福島県 児島 民男

これから申し述べることは、確かな記録が無く、薄らいだ記憶に基づいていることですので、事実と多少の違い、また田舎育ちの無学の私ですので、難しい言葉での表現など出来ません。ご理解ください。

私は昭和五（一九三〇）年三月二十日、現在の喜多方市で生まれました。入隊当時の家族は両親、弟三人、妹三人の九人の大家族でした。父は畳職人、母は今で言う専業主婦で、父一人の収入に頼った家計でやり繰りに母が苦勞しておりました。ここで私の故郷について述べますと、皆様ご承知の通り、当地は「喜多方ラーメン」「蔵の町」として全国に知られております。ラーメンは昭和二、三年頃、二人の中国人がおられまして、「支那そば」を作り、リヤカーに屋台を乗せ「夜鳴きそば」

を売り歩いたところ味の良さが評判になりました。そして「夜鳴きそば屋」を開店したところ、ますます繁盛しました。これに目を付けた地元の飲食業店などが次々にラーメン店を開き、「喜多方ラーメン」として売り出し、現在専門店が百八十軒ほどに増えています。またお土産店、駅の売店、旅館等でもお土産品として売られ、最近では通信販売、各地のスーパー、百貨店等でも販売されるようになりました。

「蔵」は大昔、大火事があった際、土蔵が焼け残ったことで蔵の良さが見直され、家を新築するなら「蔵」と次々増えました。一般に「蔵」と言えば耐寒、対暑、耐火性があり、高級衣類、貴重品、米、味噌、漬物等の貯蔵用ですが、喜多方の蔵は住居が主で、他に地方の貯蔵蔵を兼ねております。このため一般住居はもちろん、駅舎、学校、郵便局、トイレ等にまで蔵の仲間であり、当地の写真屋さん、蔵の内外、蔵での生活などの写真集を出版して全国的にラーメンと共に知られるよ

うになりました。

また大昔、会津地方は日本海同面の海でしたが、地盤変動で海水は盆地に浸透し、地熱で暖められ、地表に塩辛い熱湯が出ているのを当地の寺の開祖が発見し、開湯六百年の歴史がある熱塩温泉の宿々があります。優れた効能特に子宝の湯とも言われ、会津の奥座敷として人々に安らぎを与えております。

以上申し述べた町で育った私、民男少年は、昭和十八年、喜多方尋常高等小学校の高等二年在学中に、担任の武藤由秋先生から以前にも話したことがありますが「少年兵を志願しないか」と言われました。

私は長男であり卒業したら父の後を継ぐ覚悟であり、父も同じ考えでおりましたので、お断りしました。ところが先生は私の近隣の新聞販売と酒販売の店主に依頼して父の同意を求めたところ、戦時中のことでもあり、それほど先生が勧めるなら国のため尽くさせて貰いますと承諾しました。

当時、予科練と言えば青少年の憧れの的であったので、受験願書を提出して受験勉強に励みました。当時、陸軍の志願は身体検査に合格すれば良かったのですが、予科練は学科試験も有り、合格率が低いので不安でした。受験の結果、一次、二次試験共に合格し、先生はじめ町民の皆さんから祝福を受けました。二、三日たってから武藤先生から呼び出しがあり、俺の留守中は五年生の授業を見てくれと頼まれましたので、私は五年生位の授業だったら自信があつたので引き受け、入隊まで勤めました。

武藤先生は剣道七段、練士の資格有り、当時中学校（現在の高校）では武道は必修科目でした。そして近隣の学校へ出張して教えておりましたので他の先生が代って授業しておりました。また出産で休んでいる先生がおられて先生が不足しておりました。

昭和十九年七月二十一日付で喜多方町長名で次の入隊通知書が入りました。

右志願兵ノ入隊ニ関シ左記事項依命示達候也
追テ入隊旅費支給スヘキニ付七月二十八日九時
印章携帯当役場ニ出頭相成度シ

左記

一、入隊期日及入隊先

イ、昭和十九年七月三十一日午後二時参着

全 八月 一日入隊

七月三十一日参着後直接航空隊ニ收容

セシメラル

ロ、三重海軍航空部隊

三重県一志郡加良洲町東海道線名古屋駅

乗換関西急行津駅下車

二、輸送

イ、志願兵ハ七月三十日午後一時迄ニ郡山駅

前ニ到着シ本県派遣員ノ指示ヲ受ケ出發

スルモノトス

ロ、弁当ハ七月三十日夕食迄持参七月三十一

三、注意事項

イ、志願兵ハ単独入隊及入隊者ノ付添ハ一切

認メザルニ付格守スルコト

ロ、服装ハ青年学校及国民服等軽装ノコト

昭和十九年七月二十一日

福島県耶麻郡喜多方町長 風間乗二印』

右に従い当地からの同時入隊者であった庄司、
富田、阿部、都倉の四君と共に歓呼の声に送られ
故郷を後にしました。予科練は志願兵のみですの
で年令に差があり、私は最少年でした。入隊二、
三日後から、起床から消灯ランプが鳴るまで「月
月火水木金」の厳しい初年兵教育が始まりました。
た。

午前中は数学、理科等学科、午後は体育、魚雷
の構造、航空機の構造等の実技に関する教育でし
た。入隊前に軍隊生活経験者から聞いて、ある程
度の覚悟はしておりましたが、私的制裁の酷さには
驚きました。

同年兵の中に煙草を吸う者がおり、先輩に見ら
れたら大変「初年兵集合、一列に並んで歯をくい
しばれ」「君等は二十歳未満だ。酒、煙草は禁じら
れていること知らんか。吸った者に注意しない。
君達にも連帯責任がある」、途端に拳でのビンタが
飛ぶ。よろよろすると「弛んでいる」とさらに一
発、中には口から血を流す者や、二、三日食事が
満足に出来ない者もありました。

雨天時の外出には合羽を着用しますので階級章
が良く見えないため、よく先輩に欠礼することあ
ります。欠礼したら大変、民間の方のおる前で殴
る蹴るの制裁、民間の方は手で目を塞ぎ、中には
涙を流しておられる方もおられました。

兵舎内外の先輩への欠礼、軍靴の手入れが悪い、
軍足が汚れている、軍服の襟布が汚れている等で
ビンタが飛ぶ。ハンモックにぶら下がりが蟬の真似、
狭い衣類箱に頭から押し込まれ、しゃがんでの長
時間、練兵場周囲の駆け足、海軍精神教育棒の所
構わずの殴打等です。

また、初年兵は激しい教育のためによく腹を減
らします。同郷の先輩もこのこと知っておりまし
るのでパン等の差し入れがあり助かりました。毎食
交替で下士官室へ食事を運びます。食事後、食器
下げに行くと、残っている物はここで食べて行け
と、面倒みのよい上官もおれば、隣の下士官のよ
うにお茶で含嗽して残った食事に吐き出す意地悪
い上官もあり、この上官には食事を運ぶ前に、皆
で頭のフケをご飯に払い落してから運びました。
この上官現在、元気かなあ。

なお午後からの海水浴実技教育で溺死した二人
が、戦死として靖国神社に祀られています。ご
遺族のご心痛をお察し申し上げ、心からご冥福を
お祈りいたします。

連日このような軍隊生活でしたが、昭和二十年
三月、静岡県藤枝の航空基地に移動し、特攻機の
出發準備や陣地構築作業に当りました。当地で同
郷の田中、相田両氏と会いました。

五月、神奈川県第二相模航空隊に移動し、こ

こでも陣地構築や山腹に器材貯蔵倉庫造りの横穴掘りに従事し、七月には三重県原隊へ復帰し、近くの山地に民間の方々と共に宿舎や器材庫造りに従事しました。

八月二十日、終戦になったことを知らされ、部隊に戻り身の回りを整理、少量の米と故郷までの鉄道乗車券を頂き、二十三日、伊勢の高茶屋駅から貨物列車等を取り継ぎ、二十六日、一年余りで元気な体で帰宅、家族と再び会うことができ幸せでした。

二、三日静養して、父の手伝いをするため畳屋としての技術習得に努め、現在畳屋の主人として、長男の建築業の専務と共に頑張っております。

また軍隊当時、国のために尽くすこと出来なかったので、何かをと思ひ消防団に入団し、軍隊で鍛えた体、精神を生かして、事故無く副団長として五十一年間勤め、勲六等旭日章を受章したことは、短かったけれども軍隊生活の経験あったことと感謝しております。

追記

入隊当時の分隊長 海軍大尉

山田

分隊長 海軍准尉

原口イラカ

班長 海軍二等兵曹

徳増正男

復員当時の私 海軍飛行兵長

番号 横志飛四三九二八